
バカと恋姫と召喚獣 蜀董のコラボレーション

カイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと恋姫と召喚獣 蜀董のコラボレーション

【Nコード】

N2880V

【作者名】

カイト

【あらすじ】

この小説はバカとテストと召喚獣と恋姫のクロスオーバー作品です。蜀董とありますが魏と呉も出る予定です。要望があれば可能なら真の人も出します。更新は不定期ですがよかったですら見てください。

バカと始まりと首絞め地獄(前書き)

更新は不定期ですがよろしくお願ひします。

バカと始まりと首絞め地獄

春、それは学生たちにとって新たな学年の始まりでもある。ある者は新たな学園生活に胸を躍らせ
またある者はやっていない宿題をどうごまかそうかが策し
またある者は……………

「ZZZZZZZZ」

学校があることも忘れそのまま眠り続ける。その男の名は吉井明久。文月学園の観察処分者にしてキング・オブ・バカの称号を兼ね備える男。

その吉井明久に新たな不幸が忍び寄ろうとしていた。玄関の扉が音を立てずに静かに開けられ音も無く小さな影が移動していく。

そして明久が寝ている寝室の扉が開けられ小さな影が明久に向かって飛びかかった。

「明久兄ちゃん起きるのだー！！」

「な、なにごブルアア！！」

ああ、目が冷めたと思ったたらまた眠くなってきた……

「ってこのまま逝ってたまるか！」

ふう、一話目からいきなり逝くところだった…ん？何を言ってるんだ僕は？

「明久兄ちゃんやっと起きたのだー」

僕のお腹の上では思いつきりダイブしたと思われる張飛こと鈴々が

くつ首が…今日は朝から執拗に首にダメージを受けている気がする。
「げほっ！ 何するんですか」

「すまんすまん。しかし吉井、何か忘れていないか？」
忘れてること？ 僕に限ってそんなことあるわけが…：そうか、そ
ういえば忘れてた

「そうですね、今日も肌が黒くて暑苦しいですね」

「お前は遅刻の謝罪よりも俺を怒らすほうが重要なようだな」

「せ、先生！ それ以上絞めると息が…：」

「ふんっ！」

「げほっ！ げほっ！」

まったく、暴力教師め。

「何か言いたそうだな吉井」

「いいえ滅相もない」

なんで大人は僕の思考を読んでくるんだろう

「全くお前は…：もう一つの忘れ物だ、受け取れ」

そう言うと鉄人が封筒を渡してきた。

「何ですかこれ？」

「クラス分けの紙だ」

「あ、そうなんですか。わざわざ手渡しじゃなくて掲示板にでも貼
り出したらいいのに」

「ウチは世界的にも注目されてるからその一環だそうだ」

「へー」

む、なかなか開か無いな

「吉井、今だから言うがな」

僕が封筒を開けるのに苦悩していると鉄人が話しかけてきた。

「はい、なんですか？」

「俺はお前を去年一年を見て、『もしかすると、吉井はバカなんじ
やないか？』なんて疑いを抱いていたんだ」

なんて見当はずれの疑問を抱いているのだろう。

「それは大いなる誤解ですね。そんな誤解をしているようじゃ、さらに『節穴』なんて渾名をつけられちゃいますよ?」

全然開かない、どれだけ強固にのりづけされているんだ。

「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違えに気づいたよ」

「そう言ってもらえると嬉しいですよ」

もういいや破いちゃえ

「喜べ、吉井。お前への疑いはなくなった」

やっとクラスがわかる。僕の予想ではDクラス、いや鉄人のこの言いようもしやCクラスだったりして

『吉井明久……Fクラス』

「お前は真正正銘のバカだ」

「馬鹿なアアア!!!」

僕Fクラスだと!何かの間違いだ!

「しかも吉井、お前は俺の予想を超えた」

? 何のこと?

「あの、それは一体?」

「紙の右端を見てみる」

僕が紙の端をみると代表と書いてあった。

「あ、あの先生、これは一体?」

「聞いた時は俺も驚いたがまあしっかりやるんだな
そんな、まさか、僕が!?

「お前は今日から、Fクラス代表だ!」

「ま、マジかよオオオ!!!」

バカと始まりと首絞め地獄（後書き）

ご意見ご感想があればどんどん送ってください。

バカと説教と雄二の思考（前書き）

明久到着前のFクラス

「……………」

「ちょ、ちょっと愛紗が尋常じゃない殺気はなってるんだけどなんとかしてよ翠」

「む、無茶言わないでくれよ美波、いくら私でもあれに話しかける勇氣はない」

「明久が来たら大変なことになりそうじゃの」

「…………朝からグロテスクの光景が広がる……」

今回出番が無い、もしくはあまりない四人に喋らせて見ました。

「…………え！？ これで出番終わり！？…………」

秀吉はあるけどね

「…………なんでさ！？…………」

バカと説教と雄二の思考

「まさか僕がクラス代表だなんて……」
鉄人からその勧告を受けてから僕はうなだれるように教室に向かっていた。

明久が歩いていると大きな教室が見えてきた。

「あれってAクラス！？ リクライニングシートに個人パソコン、しかもフリードリンクサーバーにお菓子が食べ放題だなんて！？ いいなAクラス……っとこんなことしてる場合じゃないか」
ただでさえ遅刻していることを思い出した明久は急ぎ足で教室に向かった。

「……なんて汚い扉なんだ……これが格差社会というものか」

明久の目の前にはいかにも立て付けの悪そうな扉があり、上段にある取れかかっているプレートにはFクラスと書かれている。

「いやいや、教室はこんなんでもクラスメイトはきつとまともな人のはずだ。僕は代表なんだからきつとみんな少しの遅刻くらいなんでしょうわないよね。よしそれじゃあ……すみませーん遅れちゃいました」

扉を開け放ちまず明久に捧げられた言葉は……

「早く座れ、このウジ虫野郎……！」

かなり酷い罵倒であった。

「酷いって雄二じゃないか。なんで教壇に上がってるのさ」

いきなり僕に罵声を浴びせてきたのは、僕の悪友とも呼ぶべき男の

坂本雄二だった。

「なに、少し先生が遅れてらしいからな、かわりに教壇に立ってみた」

「へーじゃあもう少し遅れてもよかったのか」

「代表ともあるう人がそんなこと言っているのか」

「え、雄二って僕が代表って知ってたの」

「ああ、全くなんでお前が代表なんだか。全くもって想定外だ」

「む、それはどういう意味さ」

「お前みたいなバカがどうして代表になんか慣れたんだという意味だ」

「ちよつと！　せめてもう少しオブラートに包んでいってよ！」

「最初はそうしただろうが！」

「あ、あれ？」

言葉巧みに僕を翻弄してくる。相変わらずズル賢い男だ。

「全くほんとなんでこいつが代表に。こっちは代表になるよう点数計算したっていうのに」

「????」

なんか雄二がボソボソ呟いているけど何言ってるんだろ？

「おや、ようやく我がクラスの主がご登場か」

明久が考え込んでいるとクラスの奥から一人の女性が現れた。

「あ星じゃないか。一体どうしたの？」

「どうもこうも我がクラスの主に挨拶に来たのだが」

「え！？　星がFクラスなの。試験中に何かあったの？」

「なに、堅物のAクラスに行くよりみなが集まりそうなFに行っただ方が面白いと思ってな」

「とまあそういうわけでFクラスに来たそうだ」

「はは、星らしいと言ったら星らしいね」

「そんなことよりもほれ、主の幼馴染が鬼の角をはやしてやってきたぞ」

「げっ!!」

「おおほんとだ、じゃあな明久。頑張れよ」

「ちょ、助けてよ雄二!」

「やだね、とぼっちりはゴメンだ」

そっつい雄二は教室の後ろの方に行ってしまう。

「ええい、星でもいいからたす…ってもういないし!?!」

気づけば星もおらず明久は教壇の上でただ一人たたずんでいた。

「明久遅かったな」

明久の前に黒髪が美しい少女がたたずんだ。……ただし形相は鬼のようだが。

「お、おはよう愛紗。今日もいい天気だね」

「ええ、いい天気ですね」

いい笑顔なのに今すぐこの場を離れたいと思うのは気のせいではないだろう。

「それで明久、何故今日は遅刻したのですか？ 理由を聞いてあげますから話して見てください」

「あ、愛紗！ 話す、話すからそれ以上首を絞めつけるのは止めて」

「これこれ愛紗、それでは話せぬまい。一旦放してやらんと」

「秀吉君がそっついなら」

首を絞めつけられていた明久を心配したのか、秀吉がよってきて愛紗をとめた。

「げほっ！ げほっ！ ありがとう秀吉、もう少しで死んだ爺ちゃんと再開するところだったよ」

「礼には及ばんが、お主らのスキンシップは相変わらず過激じゃのう」

「ははは」

僕はそのスキンシップで毎回逝きかけてるけどね。

「全く明久ときたら。だいたい、昨日も注意したと言っのに夜遅くまでゲームをしてるから初日から遅刻するはめになるので…」

…」

うっ…お説教が始まっちゃた。

「それではワシは失礼するぞい」

「ああ秀吉！」

せっかくの癒やし要因が言ってしまううう。

「ましてこれからあなたはクラス代表と言う立場であって……聞いているのですか明久！」

「はい！ 聞いてます！」

SIDE 雄二

全くあのバカは本当に俺の予想を超えてくれる。あのバカを見るとテストの点数配分までした俺がバカに見えてくる。いやむしろあのバカに負けた自分にも腹が立つ。

「おやおや坂本殿、苦が々がしい顔などしてどうかしたのかね？」

俺が自席で考え事していると星の奴がいつの間にか目の前にいた。明久も明久だがこいつもこいつで何を考えているかよくわからん。

「何、あんなのが俺たちの代表でこれからが心配になっただけさ」
俺が愛紗に叱られて縮こまっている明久を指さすと星が不適に笑を漏らす。

「ふふ、確かに頼りな下げだが主にはそんなこととは別の才能があると思うが、坂本殿はどう思いますか？」

確かに星の言うとおりあいつには不思議な魅力がある。人を引きつけるだけでも言えいいのか？ 普段はただのバカだが悔しいことにあいつは俺が持つていないものを持つている。

「さあな、俺が言えることはあいつはバカだということだけだ」

「……なるほど。実に坂本殿らしい答えですな」

星の笑は何もかも見透かしているようで若干腹が立つ。俺もまだまだということか。

「そついえば星、お前一年のころは明久のこと普通に呼んでたよな、なんで主に変えたんだ？ ひよつとしてあいつに惚れたか？」

「さあどうでしょうな、もしかしたら惚れたかもしれませんぞ」

さっきの反撃も含めて俺が質問するが普通に答えがかえってくる。少しは動揺してくれないと面白みがねえな。

「まあ主に変えたのはこれからは戦争で主にしたがって行くわけですし雰囲気だしですかな」

「嘘こけ。半分は本音だろうがもう半分は明久をからかってるだけだろ」

「おやおや、坂本どのにはかないませんな」

ほんと喰えねえやつだなこいつは。まあいい手駒が入ったことには違いないか。

「それでは坂本殿、戦争の時はよろしく頼みますよ」

「……俺が試験召喚戦争するといったか？」

「ただそんな予感がただけですよ。まあ坂本殿がしなくても主ならそのうち始めると思いますが」

それだけ言うと星は俺のいた席から離れていく。何もかもお見通しってわけか。せいぜい戦争でもその才能を生かしてくれるよ。

さて、星にはああ言ったが俺が試験召喚戦争を起こそうとしているのは事実だ。あのバカに代表の座を搔つ攫われるっつうイレギュラー要素が出たがまあそこまで問題はないだろう。むしろあいつの操作テクがあれば追い詰められても少しは持つから結果オーライか。それにあの科目を配置しとけばAクラスに囲まれても三人までなら問題なく潰せるだろう。

クラスメンバーは事前に鉄人に聞き全員把握済みだ。使えそうなカードは、まずはムツツリー二の保健体育か、保健体育なら一騎打ちならあいつが負けることはそうそう無いだろう。大富豪と言うなら？の3のカードだな。普段は雑魚だが特定のカードには最強のカードに成り得るから枠あてにもピッタリだろう。もう一つの特技も戦争には大いに役立ちそうだ。

次は秀吉か、点数は低いがあの演技力はかなりの武器になりそうだ。カードで言うと8だな。いろいろな使い方がありそうだ。

島田は数学はBクラス並みにあるから部隊長を務めてもらえばいいだろう。日本語を覚えたらAクラス並みの点とれんじゃねえのか？カードで言うと6くらいだが凡庸性がありそうだな。

翠の奴もいたっけか、あいつたしかDクラスくらい成績なかったか？まあ居てくれたことには感謝だが、星の予想道理一年のころの奴らが勢ぞろいしてんじゃねえか。翠は点数はそこそこだが腕っ節はあるから切り込み隊長的な存在になってくれるだろう。カードで言

うと9くらいか。まあ腕っ節なんていつたらこのクラス大半の女子が学園最強クラスだけだな。素手の喧嘩なら負けねえだろうが武器もたれたら勝ち目ねえかもな。

それと星がいたのも大きいな、あんな奴だが成績はAクラスでもかなりの高位にいたからな。カードで言うならAだな。ここぞという時の懐刀的存在だな。

愛紗も星と同様で助かるな。ここに来た理由が鈴々の奴が病気で看病するために休んだっただけか？まったく妹思いなことで、試験受けてたらAクラスの中堅位にはなれただろうに。愛紗には悪いありがたい。カードで言うならキングだな。どこで使ってもいい働きをしてくれそうだ。

それと姫路がいたな。これは大きいな。姫路はAクラスでも久保と並んで学年次席を争えるほどのレベルだからな。翔子には勝てねえがかなりの戦力だ。カードでも2だな。一対一ならほぼ負けない最強クラスのカードだ。

それと呂布がいるのか、こいつは点数も低いし扱いづらいがある意味最強だしな。今は教室に居ないがまた外のどこか屋上で昼寝でもしてるのか？こいつとコミュニケーション取れるのは明久くらいだな。二人ともものほほんとしてるから何か通じるところでもあるのか？しかし呂布とだけは喧嘩したくねえな。素手でも勝てる気さえしねえ。武器持たせたら鉄人以外誰も手が付けられなくなるんじゃないか？

最後に明久か。俺を差し置いて代表になったバカ。ほんと腹ただしい奴だが、観察処分者のメリットととしての操作性のおかげで最初に挙げたよう役立つはずだ。この二人がこのクラスのジョーカーだ

な。確かこの二人がコンビ組んだことあったよな。何があったのか噂では教師の召喚獣を圧殺したとか言われてたな。それがほんとなら最高に嬉しい誤算なんだが、戦争でそんな掛けもできないしな。

……クラスメイトを確認したがほんとに凄まじいメンツが揃っているな。これならAクラスにも真つ向勝負してもいけんじゃねえか？できれば俺以外にもう一人作戦を考えられる奴が欲しいんだがさすがにそこまで警沢は出来ねえか。なにこのメンツがいれば問題ねえ。世の中学力だけが全てじゃねえってことを証明してやる。

覚悟しとけよAクラス…いや翔子！！

バカと説教と雄二の思考（後書き）

次回予告

「私は関羽、字は雲長、親しき中には愛紗と呼んでもらっている」

「僕が代表の吉井明久です」

「俺が代表を補佐しようと思う」

「すみません、遅れました」

「「「「えっ!?!」「」「」

次回 バカと代表と自己紹介

ご意見ご感想お待ちしております

代表とバンジーと自己紹介（前書き）

少し前回の予告と変えてあります。それではお楽しみください。

代表とバンジーと自己紹介

愛紗の説教が始まって三十分、そろそろ足が痺れてきたよ。というより何時になつたら先生は来るのさ、まさかFクラスには担任さえ与えられていないの？

「……ですのでこれから遅刻もせず無駄遣いを控え人並みの生活を贈れるようにしてください。解りましたね明久」

「はい！ 解りました愛紗さん！」

ようやく終わったよ。まったく朝からついてないや。

「ところでどうして今日は遅刻したんですか？ 確か遅刻しないよう鈴々に一定の時間を過ぎたら起こすよう頼んだはずでしたが」

「それは……」

僕が今朝の出来事を話すと、愛紗はため息をついた。

「はあーまったく鈴々は…帰ったらきつく言つてやらんな」

鈴々ご愁傷さま。今日のご飯は豪勢にしてあげるよ。

「どうやら痴話喧嘩は終わったようですね」

僕へのお説教が終わつたのを見て星や他の皆がこちらにやって来た。

「星、痴話喧嘩ではないといつも言っているだろう」

愛紗の言つとおり痴話喧嘩ではないね。実際喧嘩なんてしたら一方的に叩きの目されそうだし。

「すまんすまん夫婦喧嘩の間違い出会つたな」

「セーイ……」

「冗談だ冗談、そんな怖い顔をするな」

「明久、もう尻に敷かれっぱなしだな。羨ましいこつた」

雄二の奴が茶化してくる。そういう冗談はやめて欲しいよ

「アキ、まさか愛紗に変なことしてないでしょうね」

「み、美波！ 何もしてないから首を絞め付けるのを止めて！」
僕の命にかかわるから。まったくこの学園の人たちはこういう話に
敏感だな。

「そんなことより明久、時間もそろそろいい頃だしクラスの自己紹
介を始めないか？」

「自己紹介？ なんで？」

せつかく先生が来てないんだしもう少し喋ってたほうが楽しいのに。
こいつこんなに真面目だったっけ。

「代表としてそれくらい知っとくべきだろ。何かあったときクラス
メイトの名前もしらんと困るだろ」

「そういうもん？」

「そういうもんだ。何、脳がミジンコ並みしかないお前のかわりに
俺が代表補佐をしてやるから安心しろ」

「そうなんだありがとうって誰がミジンコ並みだこら！」
危うくそのまま感謝するところだった、なんでこいつはいちいち刺
のある言い方しかできないんだ。まあこいつの性格の歪み具合は今
に始まったことじゃないし許してやるとしよう。

「まあともかく自己紹介するぞ、お前ら一旦席に付け！」

雄二がクラス中に聞こえるよう大声で言うともみんなは好きな席に付
き始めた。

「さて全員席についたな、それじゃ自己紹介始めるぞ。まずは明久、
代表のお前からだ」

「え、僕？ まあいつか。えーと僕がFクラス代表の吉井明久です
みなさん好きに呼んでください」

まあこんな感じでいいよね。無難なところだし。

「吉井だつてよ、お前聞いたことあるか？」

「さあ、別に男なんてどうでもいいよ」

「どうせFの代表だし」

あれ、なんだか雨が降りそうだな。目の辺りに雫が降りてきたよ。

「さてバカの紹介も終わったところで次は俺だな。俺は坂本雄二だ、一様こいつの補佐役だ。まあ呼び方は好きに呼んでくれ」

雄二の奴偉そうに自己紹介したな。まあどうせ僕より酷い印象に決まっているさ。

「坂本って確か昔神童って呼ばれてなかったか？」

「ああ、じゃあFにきたのは体調不良だったのか？」

どうして雄二の奴があんなに高評価を……みんな、そいつはただのバカだ！ 昔の肩書きに騙されちゃいけない！

「それじゃあ次、席の一番右端の奴から簡単に自己紹介していつてくれ」

既に勝手に自己紹介を進めている。僕の立場って一体……

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる、これから1年間よろしくたのむぞい。ちなみにわしはよく女扱いされているがれっきとしたお『へつくしよん!!』……」

「うるさいぞ明久」

「ごめん、風邪でも引いたのかな？」

「はっはっは馬鹿だな、お前が風邪をひくわけないだろう」

何を言ってるんだこいつは、僕だって風邪を引いたことだってあるというのに。そういえば秀吉何を言おうとしたんだろ？

「……土屋康太……」

立って一言そう言つとまたすぐ座った。相変わらず無口だなあ。

「次はあたしだな。あたしは馬超翠だよろしくな」

相変わらず男らしいな翠は。まあその男らしさの反面体の方はゲフンゲフン…何かこれ以上考えると命に関わりそだから止めとこう。

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話ができるけど、読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は……」

一旦区切り、明久をちらりと見てから一言。

「吉井明久を殴る事です」

はっはっは困った子だなあまったく。でも代表になった僕に暴力を振るうなんてそんな馬鹿なことするわけない……

「これからよろしくね吉井」

……と思ったけどさっき受けた攻撃と目が代表だろうと容赦しないと言っているようだ。今までどおり接してくれることは嬉しいけど少しは敬ってくれないかな。

「どうした明久、顔が青いぞ」

「いや、僕はこれからも虐げられていくのかと思うと悲しくなってる」
「なんだそんなことが」

そんなこと当たりまえだとも言わんばかりの態度でまたクラスメイトの自己紹介を聴きに戻る雄二。少しくらい心配してくれてもバチは当たらないと思う。こうなったらコイツにも僕と同じ不幸が舞い降りるよう毎日三回祈ってから寝てやるからな！

「私は趙雲星だ……」

ととつ、雄二を呪ってる内にまた進んでしまった。星にしては普通の挨拶だな、まあ普通に越したことはないけどね。

「我が代表もとい主に全力をつくして仕えようと思う、みんなよろしく頼む」

「総員構えろ！ 目標、代表吉井明久！ これより殲滅作戦を執行する！」

星の発言が原因で皆が何故か僕にエモノを構え襲いかかろうとしている。なんでどうして！ 僕が一体何をしたっていうのさ！

「ちよつ、皆落ち着いて。せ…趙雲さんも皆を煽るようなこと言わないで！」

「明久の言うとおりで落ち着けお前ら」

雄二が助け舟出してくれた！？

「ありがとう雄二。僕は君のことを……」

「こいつは何時でも殺れる。殺るなら自己紹介が全て終わってからにする」

「感謝して損したよ畜生！」

騙された、こいつはこういう奴だった。

「自己紹介を続けるぞ次の奴早くしろ」

「ちっ須川亮です趣味は……」

皆が渋々席に座り自己紹介を再開したが今だに殺気がびしびし伝わってくる。代表なのにこの扱いどうよ？

「私は関羽愛紗です。代表とは幼馴染なのでもし明久が何か迷惑をかけたら遠慮なく言ってください」

愛紗さん…僕は出来の悪い子供ですか？ そして僕に突き刺さる殺気がさらに強まった気がするよ。そして何故か美波からどす黒い才一ラが感じられる。

その後はなんの問題も無く自己紹介は終了した。そして……

「これより異端審問会を執り行おう!!」

「「「おおっー!!」」」

僕の死刑執行が始まろうとしていた。なにやらいつの間にか異端審問会なるものまで作られている。

「福村第一級審問冠罪状を読み上げたまえ」

「はっ！ 罪状、吉井明久は我がクラスメイト趙雲さんに代表であることを理由に主と呼ばせあまつさえいろいろ奉仕させよう……」

「ええいまどろっこしい！ 簡潔に言いたまえ！」

「主と言われて羨ましいであります！ あと関羽さんと幼馴染で羨ましいであります」

「うむ、簡潔で素晴らしい」

なんて理不尽な罪状なのだろう。幼馴染なのは否定しないけど僕が星に主って呼ばせているわけじゃないのに。

「ちよつと皆、皆の考えていることは間違いであって……」

「被告に発言権は与えられておらん！」

「そんな！ 冤罪にも程がある」

「それではこれより紐無しバンジーの刑に処す！ 意義のあるものはいるか？」

「」「異議なし！」「」

「うむ、いい返事だ」

まずい、こいつら本気だ！ こうなったら施行される前に教室からおさらばだ！

「あつ！ 吉井が逃げようとしているぞ！」

「くつ、バレたか！」

教室から出る一歩手前で逃走がバレってしまった。しかも扉は目の前だ、外にさえ出られれば僕に勝機はある！

「さらばだ！」 「すみません遅れちゃいまし……」

ガッツ 「うげっ！（はうっ！）」「」

いてて…誰かにぶつかってしまった。

「ごめん大丈夫？」

「あ、はい…って吉井君！？」

「え、姫路さ…うぼあつ！？」

「吉井を捕まえたぞおお！！」

「よくやった北村第三審問官！ 君は第二に昇格だ」

「ありがたき幸せ！」

「よしそれでは刑を執行するぞ！ 全員屋上へ駆け足！」

「……イエッサー……」

異端審問会を名乗る謎の集団は明久を昏倒させると一瞬のうちに縛り教室より出て行った。教室に残ったのは呆気にとられた姫路と明久を除くメンバーだった。

「あ、あの私はどうしたら？」

「とりあえず空いてる席に座ったらどうだ」

「あ、はい。そうします」

雄二がそう言つと姫路は島田の隣の席へと座った。

「それで明久はどうするのじゃ？ あやつらの様子だとほんとに屋上から突き落とされそうじゃぞ」

「心配ないだろ。あの馬鹿騒ぎじゃすぐ教師の目につく。それにごから屋上までの道のりには補習室があるからな。あの騒ぎ方なら鉄人に見つかるだろ」

「なるほどのつ」

『貴様ら何をしているかあああああ……！』

雄二の予想道理廊下から鉄人こと西村宗一の怒声が聞こえてきた。

『ま、まずい。全員散会！』

「ほらな」

「まさに予想的中じゃのう」

その後鉄人が全員捕まえて教室に戻ってきて今日のFクラス担任は欠席というのべを伝えたみたい。

ちなみに僕は教室のはじめに放置されていて目が覚めたら愛紗の背中の上でした。誰か起こしてくれてもいいのに。

僕の新学期初日は大半が気絶で終わってしまった。代表の扱い方になってないクラスメイトたちに僕は一抹の不安を覚えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2880v/>

バカと恋姫と召喚獣 蜀董のコラボレーション

2011年10月2日03時57分発行